# Sagor för barn på svenska

berattelser.se

## ブーシーのお姉さんが言ったこと

Skriven av: Nina Orange
Illustrerad av: Wiehan de Jager
Översatt av: Kohei Uesaka

Denna saga kommer från African Storybook (africanstorybook.org) och vidarebefordras av Sagor för barn på svenska (https://berattelser.se/), som erbjuder sagor på många språk som talas i Sverige.

Detta verk är licensierat under en Creative Commons
Erkännande 3.0 Internasjonal Lisens.
https://creativecommons.org/licenses/by/3.0/deed.sv

# ブーシーのお姉さんが言ったこと

Nina Orange
Wiehan de Jager
Kohei Uesaka
japanska
nivå 4

(utan bilder)

ある日の朝早く、ブーシーのおばあちゃんはブーシーにお遣いを頼みました。「ブーシー、この卵をお父さんとお母さんに届けてくれないかい? 二人はこの卵で、お前のお姉ちゃんために大きなケーキを作りたいんだ。」

ブーシーのお姉さんは少しの間考えて、それから言いました。「私の弟、ブーシー。私はほんとに贈り物のことは気にしてないわ。それどころかケーキのことさえ気にしてない！ みんなが揃って、私はそれだけで嬉しいわよ。さあ、かっこいい服に着替えて、今日をお祝いしましょう！」そして、ブーシーはその通りにしました。



お父さんとお母さんのところへ行く道の途中、ブーシーは果物狩りをしている二人の少年に出会いました。少年はブーシーから卵を取り上げ、木に向かって投げつけてしまいました。卵は割れてしまいました。

「何てことしてくれるんだ！」と言って、ブーシーは泣き出しました。「これはケーキのための卵なんだ。そのケーキは僕のお姉ちゃんの結婚式のためのものなんだ。ウェディングケーキが無かったら、お姉ちゃん何て言うかなぁ……」



「どうしよう。」ブーシーは泣き出してしまいました。「大工が藁のお詫びにくれた贈り物の牛は逃げちゃった。大工は、果物狩りの少年からもらったステッキを折ったお詫びに藁をくれたんだ。果物狩りは、ケーキに使う卵を割ったお詫びにステッキをくれたんだ。そのケーキは結婚式のためのものだったんだ。今、卵も、ケーキも、それから贈り物も無いよ……」

けれど牛は、夕食の時間になると農家おじさんのもとへ帰ってしまいました。そしてブーシーは道に迷ってしまいました。ブーシーがお姉さんのところに着いたのはだいぶ遅かったので、とっくにパーティーは始まっていました。



少年たちはブーシーをからかったことを謝り、「僕たちはケーキを作ることはできないけど、代わりにこのステッキを君のお姉さんにやるよ。」と言い、ステッキを渡しました。ブーシーは再び歩き始めました。

道の途中、ブーシーは家を建てている二人の男に出会いました。男の人はブーシーに「その丈夫そうな木を使ってもいいかな？」と聞きました。しかしそのステッキは家を建てられるほど十分に強くはなく、折れてしまいました。



牛は食いしん坊を謝りました。農家おじさんは、牛がお姉さんへの贈り物としてブーシーに付いて行くことに賛成しました。そしてまたブーシーは歩き始めました。

「何てことしてくれるんだ！」とブーシーは泣き出しました。「あの藁はお姉ちゃんへの贈り物だったんだ。大工が、果物狩りの少年からもらったステッキを折ったお詫びにくれたんだ。果物狩りの少年は、お姉ちゃんへのケーキに使う卵を割ったお詫びにステッキをくれたんだ。そのケーキは、お姉ちゃんの結婚式のためのものだったんだ。そして今、卵も、ケーキも、そして贈り物も無い。お姉ちゃん何て言うかなぁ……」



「何てことしてくれるんだ！」とブーシーは泣き出しました。「そのステッキはお姉ちゃんへの贈り物なんだ。果物狩りの少年が、ケーキに使う卵を割ったお詫びにくれたんだ。そのケーキはお姉ちゃんのウェディングケーキだったんだ。卵も、ケーキも、それから贈り物も無い。お姉ちゃん何て言うだろう……」

大工は、「僕らはケーキを作れないけど、代わりにお姉さんにこの藁をあげよう。」と言って、ステッキを折ったことを謝りました。そしてブーシーはまた歩き始めました。



道の途中、ブーシーは農家おじさんと牛に出会いました。「何て美味しそうな藁なんだ、少しかじっていいかな? 」と牛は尋ねました。しかし藁はとてもおいしく、なんと牛は藁を全部たいらげてしまいました。